

# 古平風土物語

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第八十一号(毎月一日発行)  
平成八年六月一日

## 北海場 古平風土物語

四八

### 子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い

(4)

高橋 源五口

五月末から六月にかけて、ウナゴ漁があつた。沖村・チリノッポ(沖村街道)・群来村方面の海岸に多く寄つて来て、漁師は巻き網漁で漁獲し、釜で煮て干してから小筋(小型)・中筋(中型)・大筋(大型)に選別し、それぞれ俵に詰めて出荷していく。毎年、相当の漁があつたのである。子供たちは、この煮干しの手伝いに多忙であつた。

生鱈ははしりだと大きいもので一匹二十錢から三十錢、中ぐらいで十五錢から二十錢、小さいものは十錢から十五錢だが、當時には五錢ぐらいになることもあつた。安くなると、いさばや(魚を入れた籠を天びん棒でかつき、町を売り歩く人)のおばさん連中が町中を大声でふれ歩くが、鱈をしめ粕にする程大漁の年もあつたのである。

× × ×

せ か む い N o . 8 1

またこの頃、六月初旬から七月月中旬にかけて古平川に大きな鱈が上つて来る。雨上がりの日には川尻に溜まるので、地引き網で獲つていた。朝夕は沢山入るので、高学年の子供たちは登校や下校の途中に網引きを手伝い、二、三匹の鱈を貰うと繩に通してぶら下げ、喜び勇んで家に持ち帰つた。

夏休みになると高等科の生徒で船に強い者は、大人にまじつて夜のイカ釣り船に乗り込み、丸山岬から美國・積丹方面の遠い沖合今まで行つて、相当の漁をして来る。生イカやするために売り大きな稼ぎをする者たちもいた。トンボ釣りであつたが一晩二百尾から三百尾も釣り、慣れ

てくると三百尾以上も釣ることがあるという。こんな日は大人だと千尾も釣る人がいた。こうして働いている連中は体は赤銅色に輝き、魚の臭いがして何か一人前の漁師に見えた。

夏イカは生で一尾五厘から一錢ぐらい、夏する時は二十枚束で三十錢から三十五錢ぐらいであつた。

そのほかの海産物の値段

ワカメ(干したもの)一貫目上等七十錢、並五十錢ぐらい、花折昆布一束上等四十錢、中等三十錢、並二十五錢ぐらいだし昆布一束一貫目四十錢から五十錢ぐらい、

鮓くん製化粧箱詰め(数の子入り七本)一箱五十錢以上、上等四十錢、並三十錢ぐらい

外に出て行つたところ、突然そこへ数匹の犬が現われ番頭に飛びかかってきた。かわいそうにその番頭は犬に食い殺されしまつた。驚いた主人が駆けつけたところ、そこに死んでいたのは番頭ではなく大きなムジナであったという。怪談で信じ難いが記しておく。

『蝦夷のムジナのこと』  
松前より東のシャモ(日本人)地内に箱館という所があり、そこに『政』といふ料理屋がある。

今年の春のことであつたが、ここにある裕福な商店の番頭が遊びに来つていて、そのうち小便をするのに裏口から

アイヌの[ことわざとこなし集]から

くん製のバラものは(腹が切れたり、小型のものや形の悪いものなど)一尾三錢から四錢ぐらゐであった。また、夏になると沖村・群来村方面に三か統ホツケ・大サバ・鱈・鮪などがのる。夏から秋の頃には暖流にのつて回遊して来る鮒・河豚・ウマヅラ、時には大鮓などがある。鮒が、晚秋になると寒流にのつて回帰する鮑の群れがのつた。

値段のいいこの鮒・鮪・鮑の多い年が大漁年であつた。大漁の時の若い衆の網起こしのかけ声、作業歌はなかなか力の入つた威勢のいいものである。大漁した時は「歩」が多く当たるのと、力の入るのもまた当然のことであつた。

### ■田中鉱業㈱が経営

明治三十三年、戦後の不況からいつたん廃坑になつたが、それから僅か五年後の明治三十三年、田中鉱業㈱がこれを買つて高田為五郎が採掘と製鍊に当たつた。製鍊は初め然別鉱山へ運んで委託でやつていたが、その後産出量も次第に増えてきたので稻倉石に製鍊所を作つた。

### ■金・銀・鉱山として発展

明治三十七年には金の生産高が七百五十匁（約二八キロ）・銀が七十九貫（約一九六キロ）と再び盛んになり、明治四十二年四月には然別鉱山を経営している小田良治の所有となつた。

## —百年の歴史を閉じる—

# 稻倉石鉱山

タニギタイ通り  
のことを思い出して

竹内コトト



稻倉石鉱山からマンガンを掘り出し販売した。第一次世界大戦が始まつた大正三年頃は、マンガンの需要が急増したが大戦が終ると共に大正八年頃から需要が減り、価格も二年後には四割程に暴落した。

大正八年・同九年・同十年

六十三円 四十円 二十五円

大正七年、久原鉱業㈱

（後の日本鉱業㈱）が、

稻倉石鉱山に捨ててある鉱石に目をつけ鉱山を買収した。

量は少なかつたようだが金・銀・銅・亜鉛などの鉱石を採掘しながら、堆積している捨て石の中からマンガンを選別して出荷し、大正八年には五万八千三百円余りには五万八千三百円余りなつた。

景気のよかつた大正五年には五件、六年には七

件もの試掘願いが町に出され、町内の西村東一、北林亮太郎らも鉱区を持っていて、北林は（鉱区登録番号五百三十五）金・銀鉱石は鉱山から馬で運んでいた。銅の採掘をしてみたが専属の業者は少なく、多く

決して忘れることができないあの古平大火に遭い、漁業に携わっていた人たちは漁具もすっかり焼いてしまい、途方にくれてしましました。そこへ追い討ちをかけるように、期待していたすけそが不漁ときてはどうしようもありませんでした。漁船員も加工場で働く人も本当に難儀をしました。

私もその災害に遭つたひとり

は農家の人たちが副業としていた。運搬料はかます一俵が四十

錢であった。

※ 運搬料については二十錢と四十錢とあるが、鉱石をいつたん山元から馬車の通れる中継地點まで運び、そこからさらには古平市街まで運んでいたので、四十錢というのは中継地點から

市街地までの運搬料だと思われる。また、かます一俵の鉱石の重さが三百七十五キロで、馬車一台に六俵から八俵積んだといふ記録もあるが、積み降ろしや当時の道路事情からみて再調査をしてみたい。

（続く）

大正六年、函館の国屋忠五郎が鉄の精鍊にマンガンの需要が高まってきたことに目をつけ、大正六年、函館の國屋忠五郎

で、火事の後は丸山町の公営住宅におりましたら、誰だったか思い出せませんが、工事現場の人夫の人たちの「水汲み」を頼まれました。そこで寺田トシ子さんを誘つて二人で行くことにしました。

現場は稻倉石鉱山へ行く途中の道路工事で、廻り淵の先のタモギタイといいう所でした。天気さえ良ければ毎日の仕事で、雨が降つてきても頭をかくすところもありません。だいぶ後になりましたから稻倉石行きのバスが通りましたが、当時はそこまで何里かを歩いて通いました。

また、その現場の辺りは『まむし』の巣で、そこここにうようよいました。私はヘビが大嫌いなので見ただけで震い上がりました。ところが人夫の人たちの中には、マムシを見つけたというと「ワア」と歓声を上げて走つて来て、そのマムシをびんの中に入れて喜んでいた人もいました。

ある日のこと。トシ子さんと

（次ページ下段へ）

文

芸



## 吉平ホトトギス会



突堤にローソクボッケ釣れしとか  
誰彼に分かつ楽しみ簎子採り

斎藤波留

散り紅葉せせらぎに乗り流れゆく

越野清治

木枯の吹くや家路へ遠き道

木村芳園

ゆれざるは咲き遅れたるチューリップ

大和田絵伊

鳥賊漁の対馬出漁決まりたる

星霞幻ならぬフェリー航く

本間正次郎

鶯や灌漑工事始めおり

晴天になまけておりし鯉幟

観音堂山ふところの山桜

福井久美子

堤防の治水記念碑花の中

春愁や看取り疲れもありしかと  
看取り妻花見ることもなく過ぎて

越野スミ子

岩瀬みのる

鍊空建場起点のありし岩  
火渡りの所作変わりなき猿田彦

仲谷比呂子

四島の風に乗りたる鯉幟  
サハリンの空になびける鯉幟

山口浪

初富士を拝みし沼津なつかしむ  
変わりなく七十年の紅牡丹

仲谷安女

崩落の現場合掌春寒し  
鶯の棲みよきらしき河川敷

福井幸平

鶯や選鉱場の在りしあと

野良仕事二週遅れし山桜

籠の灯をともに祈りの千羽鶴

仲谷美砂

鈴蘭を摘みし昔の修道院

雪崩たるトンネル黙祷して通り

水見句丈

灯台の膝元海苔をつむ人等



石井愛子



明治四十年(一九〇)、当時、仙台に住んでいた詩人・岡千仞が古平を訪れ、そのときの詩のほか二編を著書『北海詩艸』に載せている。

断崖絶壁難所の詩

舟遊古平  
巖壁峭立  
極為危険

という四字十行の大変難解な漢詩であるが題名の紹介にどどめる。

大正十年、童話作家として

有名な巖谷小波(きわみ)が来町した。小波の父・巖谷一六(いわく)は幕末から明治にかけての有名な書家で『明治の三筆』といわれたが、詩や文

章にも一流であった。

古平で詠んだ句に、

眼の下や夏風の濱舟の数

そのほかにも何句か詠んで

いる。



# 詩と歌の郷 古平



小波は古平小学校で児童に話をしたが、大変子どもにとつておもしろい話であつたという。夜は一般の人たちにも話をしたほか、求めに応じて筆をとつた。

小波は父譲りの立派な字を書いたが、俳句でも有名であり、古平では扇子に俳句を書いた。相当数書いたものと思われるが、色紙もふくめて一二、三點しか確認されていない。

古平で詠んだ句に、眼の下や夏風の濱舟の数そのほかにも何句か詠んで

いる。



# 幼い時代の食べものあれこれ

福井幸平

ある時、ある場所で、日本海の水位があがつて古平川から港町まで、砂浜がいつの間にか無くなつた話が出て、(因)の浜、(今)の浜、本陣の浜、港町・野村さんの浜から昔の木工場のあたりまでずうーと砂浜が続いて、今よりだいぶ広い空間があつた。野村さんでよく昆布焼いてた煙が遠くからでも見えた。あの辺は磯の藻が多く、ゴムワラで足先をよく切つたことがあつた。浜それぞれにツブ・蟹・ガンゼ・ノナ・ナマコ・鮑・テングサ・モゾク・昆布・ワカメ・フノリ等々、時化ればハタハタのブリッ子も食べた記憶がある。いつか鰯が沢山獲れたり、浅瀬にはゴリの見たこと也有つた。それにしても磯焼けとかで海岸の様子も変わつたものである。

私も、すっかり忘れてた鰯の背割りの味がなつかしい。ひと塩して、背から開いた鰯をすだれで乾かした手のこんだ製品で

ある。自家用か親しい人に贈答品として作つたものらしく、ほんのわずかばかりのものなので、貴重な忘れられないおいしさがあつた。(見欠きとは別のもの)今の若い方たちは多分知らないと思う。それに鰯の白子を乾かして保存食として、これまた煮て食べることもあつたが私は好きでなかつた。

最もぜいたくなのは、鮑を採つてそのまま浜火で焼いて、海水でちょっと洗つて食べる。つぶ・なまこ・ヒル貝同様、当時はぜいたくとも思わなかつた。それにつめガンゼ、ガンゼのへそを抜いて身だけ何個分もつめて、海水をちょっとといれて浜火で焼く(へそでふたをする時、青海苔で包んで汁がこぼれないようにする)。勿論、へその方が上向きに焼くのである。箸もスプーンもないからその辺の木の葉ですくつて食べる。いまこんな食べ方をしたら何千円だろう。毛ガニはいつでも前浜で潜つて、素手ではさまれないようにしながらこれも焼いて食べた。コッコがあるときは特においしいものです。

古平川でもよくとれた。



— 続く —

眼

杯

洗

せん

これでひとまず引き下がる。「サカズキ

をもらう」ということは、別の世界でい

えば親分・子分の関係になることで、

「サカズキを返す」となると、これは縁

を切るということであるが、宴会の席と

もなればこれはまた、まことに和やかな

ものである。これが仲間同士の酒の席だ

と、自分の飲んだ杯を杯洗ですすぎ、さ

つと水を切り「まあ一杯」と、相手に差

し出すのが習慣であり礼儀でもあつた。

家庭での祝言や法事などではこんなも

のは無いのでどんぶりだったが、杯洗も

はじめはどんぶりを使っていた。古い時

代には酒の席となると大形の杯に冷酒を

入れ、順に回し飲みをしていたが（今で

も茶会ではある）、その後、徳利（とくり）

で酒を燶して、猪口（ちょこ）で差しつ差さ

れつ飲むという習慣ができ、そのためど

んぶりに水を入れたものを使うようにな

つたというが、これは今から二百年余り

も前のことである。

この器を『杯洗』と呼ぶようになつたのは明治時代になつてからだといふ。杯洗には、見た目にも立派だと思えるようなものがあるが、資料館にある杯洗は、ほかの九谷焼といわれているものとよく

似た赤絵である。

時代と共に酒の飲み方や習慣も変わり

戦後のドブロク、カストリ焼酎から、そ

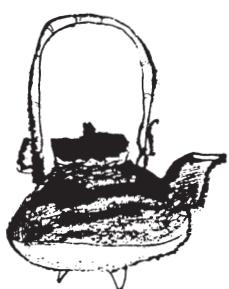
の後、ビール、洋酒の愛好者が増えるに

したがつて、日本の伝統的な酒器である

銚子・杯や徳利・猪口などが、今や文化

財になろうとしている。

※ 結婚式や神社の祭事で使われているのが銚子・杯で、一般に銚子・杯といつてゐるのは徳利・猪口の方である。



# 遙かなる故郷の思ひ出

[21]

## 古平祭りばやしのルーツ

橋 梁 義 春

子供の頃の懐かしい思い出は何をおいてもお祭りであろう。特に山車を引くのが最大の樂しみで、山車に乗って太鼓を叩いたこともある。今でも祭りばやしの太鼓と笛のメロディーは、頭の中にこびりついている。

恒例の『東京ふるびら会』の宴席でも、笛の名人・木村光夫君が山車の祭りばやしの笛を吹くと、みんなが童心にかえつて「ヨーイ、ヨーイ、ヨーイ、エンヤツ」とはやしをいれる。あの祭りばやしの太鼓と笛のメロディーを忘れてはいないのだ。たしか上り山車、止まり山車、帰り山車と、それぞれ違ったメロディーが三曲あつたと記憶している。

今から約三十年前の話だか、会社勤めをしていた頃に仲間とカメラクラブを結成して、休日を利用しては写真を撮りまくっていた。その頃、東京・青梅市や吉野梅郷で、六桜社主催の美

人モデル撮影会が梅の花の下で行われることがある。早速、仲間と花見をかねて撮影会に参加した。

その頃の青梅市は片田舎で、まだ農家があちこちに点在して

いた。畑の梅の木の下ではモルがボーズをとつてサービスを

し、私たちも夢中になつてシャッターを押していくたら太鼓と笛の音が聞こえてきた。どこかで

聞いたようなメロディーだと辺りを見たら、太鼓と笛と獅子舞の

地元の人たちの三人連れで、私たちにサービスのつもりでやつて来たものらしい。しかしみんなはカメラを持つたカムキチばかりで、獅子舞などには目もく

れなかつたが、私は「おやつ」と思わず足を止めた。なんと獅子舞の笛のメロディーが、我がふるさと古平町のお祭りの山車があ

た。古平と同じような山車がある美國ではどうだつたろう

か。古平と同じような山車があつたところはあるが、やはり

としばらく笛の音に聞きほれてしまつた。不思議だ。かたや北海道の古平町、こちらは東京の青梅市で、夢にも忘れたことがないふるさとの祭りばやしの笛の音が聞けるなんて――。しばし感慨無量という心地だつた。

獅子舞が終わつて、笛を吹いていた年配のおじさんに「私の田舎にも、おじさんの吹いた曲と同じ祭りばやしがあります」と言つたら、

「どちらですか」と聞くので、北海道だと答えたら、向こうもびっくりしていた。

おじさんの話によると、青梅の獅子舞は江戸時代からあるらしいということであつた。古平の琴平神社の創建は慶応三年と

聞いているので、やはり青梅の方が祭りばやしでは先輩ということになりそうである。

どうして古平町と、遠く離れている青梅市の祭りばやしのメロディーがこうも似てゐるのか、

最初に聞いた時から私の長い間の疑問でもあつた。古平の隣町である美國ではどうだつたろうか。古平と同じような山車があつたところはあるが、やはり



足下の地面に目をやつたら、草むらから五尺から六尺はあるうです。見たこともないような大引きで、きっと水でも飲むに来ました。見たことはない大引きで、それはもうびっくりしました。二人とも悲鳴を上げて逃げ出したことをおぼえています。

(前ページ下段より続く)

流れで来る水を穴を掘つて溜めていた時のことです。近くの草むらでなにかカサカサと音がしないようですが、そして、ふと足下の地面に目をやつたら、草むらから五尺から六尺はあるうです。見たこともないような大引きで、きっと水でも飲むに来ました。見たことはない大引きで、それはもうびっくりしました。二人とも悲鳴を上げて逃げ出したことをおぼえています。

間もなく稻倉石鉱山までのバスも通りたくさんの人人が行き来していましたが、その鉱山ももう無くなつてしましました。今は山菜採りの人たちが通るくらいなのでしょうが、あの時のことはわかつたことは、いま思い出してもぞつとする身のちぢむようないがします。

## 《大網禁令》から

## 網切り騒動

(終)

その後 —

▼冥加金で漁民を救済 網切り騒動の後、箱館奉行が蝦夷地の鮫漁についてくわしい調査をした結果、大網の使用は鮫の不漁とは関係がなく、刺網漁民の妨げになるようが減り、従つて鮫の漁獲も減少するおそれがあり、これでは蝦夷地開拓の目的に反することもあるので、試しに三年から五年間に限つて大網を使用させることにした。

もしその間に凶漁があれば、八か村の漁民を救済することを約束してひとまず漁民を納得させた。

そして大網を使用している業者から一か統につき三両の冥加金を収めさせることにしたが、

そのうちの千両で八か村の漁民救済のための『備米』をし、もし漁獲が皆無のときは金を与えて、凶漁のときは金を貸し付けるなどのことをした。

▼大網使用の禁止がとける ところがその後、凶漁をうつたえていた八か村でも相当な漁が続くようになり、大網が凶漁の原因でないことがはつきりした。また、石狩から北の地方では刺網に適さない磯に大網が建てられ、鮫漁が盛んになって部落ができるようになつた。

最初は三年から五年という期

▼行成網と枠網の発明 安政年間も終わりころになると、大網も今までの笊(さき)網から次第に、能率がよく便利な建網(行成網)が使われるようになつた。ことに枠網が発明されると、建網はいつそう便利な漁法となつていった。

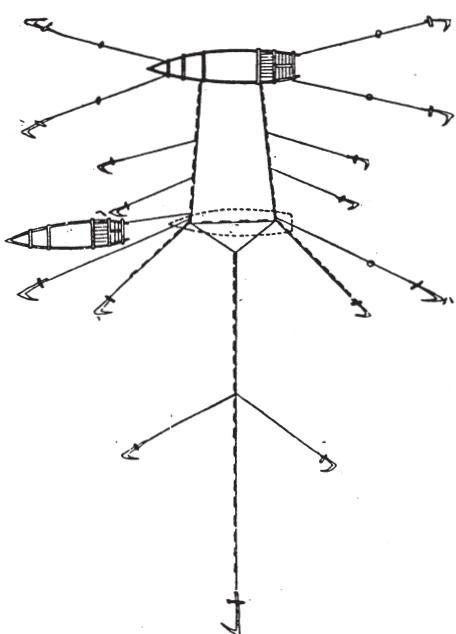
※ 枠網は建網に入った鮫を一時入れる、木の枠に取りつけた大きな袋網で、これからさらには別の船に鮫を汲み出して陸に運ぶように工夫されたもので、安政三年、群来村の漁夫秋元金四郎が考案出したものである。後に、町内の白岩八右衛門が木枠に代えてこの袋網を船に取りつけることを考えたことからさらに便利なものとなり、やがてこの方法は各場所に伝わり大いに漁獲高を上げた。

行成網からその後、さらに大量漁獲にむいた角網に変わつたが、これは積丹郡出岬村(今の大字幌武意町字島武意)齊藤彦三郎が発明したものといわれている。

▼西蝦夷地での鮫漁獲高 安政元年(一八五四)、西蝦夷地の主な場所での漁獲高はおおよそ次のようであった。

(単位は石・一石二〇・七トシ)

余市	一七・八四	積丹	二一・八〇
厚田	六・四七	七・三三	
古平	一四・三七	三・七七	
高島	六・四九	四・八五	
岩内	一七・八四	八・九九	
			*
			の場所は鮭・鰆などがふくまれているが、これは全体からみてごく少ないものである。



建網(行成網)定置図